

小学校の部 最優秀賞

「いつまでも青く、果てしなく」

神奈川県 川崎市大島小学校 6年

西澤 礼華 (にしざわ あやか)

どこまでも広がるあの青い空が、一瞬にして真っ赤に染まる。家族を失い、全身が激しく痛む。「地獄って本当に存在するんだ。」と感じた。私は、1945年8月6日の広島がこんなにも恐ろしかったということを実感できなかった。「8時15分」を読んで、原爆に対するこの上ない恐怖を感じた。

しかし、そんな地獄の中で、「激痛に耐え続けるくらいなら、いっそ死んで楽になりたい」と諦めかけていた進示さんを、何としてでも生き延びさせようとした。東照宮の階段で、二人の兵士と出会ったときに、進示さんの命を優先し決断したりした、福一さんの、進示さんへの愛情に感動した。そして、私も、福一さんのように、誰かが困っていたり、危なかったりするときは、救いの手をさしのべることができる人になりたいと感じた。

私は、タイトルにもある「許す心」は、世界平和につながると考える。世界中の人々に許す心があれば、争いなどという残酷なものは起きないからだ。お互いを許すことができれば、戦争なんて無くても問題は解決できる。だから私は、許す心がどれだけ素晴らしく、どれだけ美しい心なのかということ、できる限り多くの人に広めたい。また、そう考えるようになり、普段の家族との喧嘩(けんか)に変化が起きた。

数日前、お気に入りのメモ帳を妹に勝手に使われ、口論になった。一言謝ってくれたらそれでいいと言っても、絶対に謝りたくないようだった。私は面倒になって、「文句を言われても無視しよう。」と思ったときに、「8時15分」を思い出した。そして、妹に対して許す心が生まれた。妹は、メモ帳を使っても大丈夫だと感じたのかもしれない。本当は後悔しているのかもしれない。何より年下だ。そう考えることができたのだ。今までならあり得なかった。けれど私は、「許す心」を知っている、今の自分が好きだ。私は世界が「許す心」であふれ、戦争がなくなることを願う。

「何かをなくしたときは何かを得る時だ。」私はこの言葉がとても印象に残っている。自分にとって、この世に一つしかない大切なものが盗難にあい、さらに、その現場で何の調査も行われていなかったら、こんなに前向きに許す心で対処できるだろうか。できる人がいても、そう多くはないと思う。「私も、許す心で対処できるようになりたい。」そう思った。そのために、「相手の立場や環境を理解しようとする」ということを、忘れずに生活していこうと思う。

今を生きる私達は幸せだ。毎日学校に通うことができる。毎日美味しいご飯を食べることができる。こんな幸せは70年前にはなかった。けれど少しずつ、今の生活が「当たり前」

になっている。私達には語り継いでいく義務がある。戦争の悲惨さや許す心の大切さを。私たちの「当たり前」は「幸せ」だということを。

私は、世界から戦争がなくなり、この青い空がいつまでも青く、果てしなく続いていくことを願う。

(原稿ここまで)

※ウェブ掲載の都合上、原作では漢数字であったものをアラビア数字に改訂した部分があります (主催者)。